

(様式1)

令和5年度 学校評価結果報告書(特別支援学校用)

(1) 学校教育目標	学びをとおして自信を培い、地域の人々とともに健康で心豊かにたくましく生きる児童生徒を育てる。
(2) 現状と課題	個々の障害特性に応じた指導の充実が求められているため、特別支援教育に関する専門性の向上、児童生徒が主体的に活動できる授業づくり、生徒指導の充実、小・中・高の一貫性のある教育などが課題である。
(3) 重点目標	1 「考える」「取り組む」「分かる」「楽しむ」の要素が整った授業づくりの実践 2 全教職員の協力体制が発揮できる学校づくりを目指す 3 各障害特性に対応した研修の推進 4 各学部が連携した一貫性のある「キャリア教育」の推進と進路指導の充実 5 特色ある学校づくり「絵と花のある学校、子どもたちの歌声がひびき、笑顔いっぱいの学校」とスポーツ活動の推進 6 地域社会における本校児童生徒に対する理解促進と交流及び共同学習の推進 7 地域における特別支援教育のセンター的機能を生かした、地域への積極的な情報発信と貢献
(4) 結果の公表	保護者、本校職員のアンケート評価結果をそれぞれに配布するとともに、学校のホームページに掲載する。

学校整理番号	特19
学 校 名	青森県立七戸養護学校
対象障害種別	視覚・聴覚・知的・ 肢体 ・病弱
自己評価実施日	令和5年12月 1日(金)
学校関係者評価実施日	令和6年 1月30日(火)

(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成
・学校運営協議会委員8名
もみのき学園園長、七戸町城内町内会長 シャーローム理事長、七戸美光園理事長 佐々木石油株式会社代表取締役社長 青森県立保健大学健康科学部助教 本校PTA会長、本校同窓会副会長

自 己 評 価					学校関係者評価	(10) 次年度への課題と改善策	
番号	(5) 評価項目		(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度		(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等
1	「考える」「取り組む」「分かる」「楽しむ」の要素が整った授業づくりの実践	① ②	子どもたちが学びの目標をもって活動できる授業実践を行う。 観点別評価を取り入れた授業実践を行う。 授業力向上を目指した授業研究を行う。	I C Tを活用した授業の実践研究に取り組んだ。児童生徒の主体的、対話的で深い学びの実現に向け、各教科等の学習内容を観点別に整理したり、校内共通のワークシートを開発し、I C Tを活用する視点を整理したりしたことで、I C Tを効果的に活用し、授業改善を図ることができた。また、初任者や中堅教諭も法定研修において、積極的にI C Tを活用した授業研究に取り組み、授業づくりにおける教員全体の資質向上に貢献した。しかし、観点別評価における検証は、十分に深められず、次年度への課題が残った。	B	児童生徒の学びのために工夫された教育活動を行っている。I C Tを活用した授業研究の取り組みも良い。推進していくべきである。	来年度も引き続きI C Tを活用した授業の取り組みについて、I C T活用推進委員会や研修部と連携を図りながら、継続して進めていきたい。観点別評価については、検証を進め、指導と評価の一体化した授業づくりに取り組んでいく。
2	全教職員の協力体制が発揮できる学級づくりを目指す	① ②	P D C Aサイクルをベースにした教育課題解決に取り組む。 チームワークの活性化を図りながら全教職員が協力して取り組む。	サポート委員会を中心に児童生徒への指導、支援に対する体制整備に取り組んだ。各学級の所属するグループや学部における情報共有やケース会議等を踏まえ、家庭支援や外部機関との連携を図る支援会議を設定、実施した。学部におけるサポート体制や外部との連絡調整が整い、学級経営における課題解決への貢献が見られた。	B	先生方へのサポート体制が確立したのは、児童生徒への指導の向上はもちろんだが、先生方にとっても風通しの良い安心して指導や学級経営に努められる職場づくりにもつながる。協力体制を維持してほしい。	サポート委員会を中心とした協力体制の維持、強化のため、職員への周知を図り、早期に課題に対応できるようにしていく。ケース会議や支援会議の成果を共有できるようにし、サポート委員会の認識や活用を広めていく。
3	各障害特性に対応した研修の推進	① ②	知的障害、自閉症スペクトラム、ダウン症、肢体不自由等に関する指導の専門性の向上を目指した研修を進める。 校内研修会等による研修成果の共有と効果的な活用を進める。	日本教育公務員弘済会の教育研究助成事業を活用した発達心理学や摂食指導に関する研修会や、八戸市自閉症児者親の会主催の自閉症支援者セミナーへの定期的なオンラインによる参加、外部専門家を活用した肢体不自由児への指導助言などを通じ、専門性の向上を図ることができた。研修部、地域支援部、肢体不自由委員会、サポートで協力し、本校教員のニーズに応じた研修を進めることができた。	B	先生方は専門性向上に向けて努力しており、児童生徒、個々の特性を理解した指導に努めている。オンラインによる研修参加など、学ぶ環境は充実してきた。研修に努めてほしいが、先生方もあまり無理をしないうでほしい。	学校課題に即した県外研修に各学部から1名の参加を推奨する。研修部と地域支援部で情報共有を図り、研修会の周知を徹底するとともに研修報告会の充実を図る。サポート委員会主催の学習会の充実を図り、教員の研修機会の拡大を図る。

4	各学部が連携した一貫性のある「キャリア教育」の推進と進路指導の充実	①各学部段階におけるキャリア教育の充実を図る。 ②学部段階ごとに保護者・地域等への進路情報の積極的な提供を行う。 進路指導に不可欠な、情報収集力、選抜力、決断力、実行力を高める。	キャリアの全体計画を基に各学部の児童生徒の生活年齢等を踏まえた内容で学習を進めた。また、全校でキャリアパスポートを活用し、小中高一貫したキャリア教育を進めることができた。特に高等部においては、キャリアチャレンジ（生き方教育）を実施し、外部講師を活用しながら、生徒のキャリア発達を促す機会を計画的に設定することができた。 進路情報誌や福祉サービス情報集など、進路に関わる情報を積極的に発信した。小中学部の保護者への啓発には更に工夫が必要である。	B	進路の幅を広げ、密度を高めるためには、圏域との関わりをもつことが必要不可欠であり、関係性を強化していくことが重要である。地域の空き店舗を利用し、本校の喫茶班の活動を行うなど、地域に出て活動することを検討してほしい。	キャリアパスポートを活用した小中高一貫したキャリア教育を継続する。学校運営協議会の協力を得て、地域での作業学習の機会の拡大とキャリアチャレンジの内容の充実を図る。小中学部の保護者に対する情報発信の方法を工夫し、保護者への進路に対する意識を高める。
5	特色ある学校づくり「絵と花のある学校、子どもたちの歌声がひびき、笑顔いっぱいの学校」とスポーツ活動の推進	①造形活動、環境整備、音楽活動等の活動をとおして、子どもたちの豊かな感性を引き出す。 ②地域住民からたくさんの評価を受ける機会を設け、児童生徒及び教職員の自信につなげる。 体育の授業をとおした特スポ連大会への参加や、他校等との交流を通じたスポーツ活動及び体づくりの充実を図る。	絵画をはじめ造形作品の作品展や公募への出展を積極的に行った。数多くの児童生徒の作品が入賞を果たした。今年度から音楽集をリモートから集会形式に戻して実施したり、音楽の授業や行事で合唱を積極的に実施したりするなどして、音楽活動の充実を図ることができた。高等部では、特別支援学校スポーツ大会への参加を通じ、日頃の体育の授業の成果をいかしたり、他校との交流を図ったりすることができた。	A	活動の成果を地域住民と共有し、関わる機会を広げていくことで、児童生徒が評価を受ける機会も増え、学校理解にもつながる。取り組み自体を増やすことよりも、行事や取り組みについて地域への情報発信を検討する必要がある。	教員に対する技術指導研修や造形作品公募への積極的な出展は継続する。学校運営協議会の協力を得て、作品の地域店舗への貸出の拡大を図るとともに情報発信の方法を工夫する。音楽活動は、合唱や器楽演奏等、コロナ禍以前のような活動を目指し、音楽集会の充実を図る。高等部においては、特別支援学校スポーツ大会との関連性を図った体育の授業づくりを継続する。
6	地域社会における本校児童生徒に対する理解促進と交流及び共同学習の推進	①学校と地域が連携・協力した奉仕活動や体験活動の充実を図る。 ②学校間交流、居住地校交流を積極的に進める。	高等部の地域の清掃活動は継続して実施することができた。中学部の七戸中学校生徒との環境整備活動は、悪天候のために実施できなかった。 学校間交流は、対面形式で実施することができ、各学部毎に充実した交流を図ることができた。また、居住地校交流は、小学校15校、中学校4校と32名が昨年より継続して取り組むことができ、交流や学習内容も充実が図られてきた。	B	共生社会の実現に向けて、交流は、学校、地域相互に効果が期待される。小学部から買い物学習などに積極的に取り組んでいて良い。買い物や挨拶などの指導に終始することなく、地域住民との関わりを楽しむことを目的とした活動を実施してほしい。	高等部の地域清掃活動と中学部の七戸中学校との環境整備活動は、継続する。居住地校交流は、地域支援部が発行する居住地校交流通信の内容の充実と保護者への周知を更に図り、居住地校交流実施者の増加を目指す。居住地校交流継続者に対しては、交流学習の回数や内容の充実を図ることができるよう、相手校との連携を深める。
7	地域における特別支援教育のセンター的機能を生かした、地域への積極的な情報発信と貢献	①地区特別支援連携協議会を核として、地域の特別支援教育に関する取組を積極的に進める。 ②ホームページなどを活用し、特別支援教育に関する積極的な情報発信を行う。	地域支援部を中心に地区特別支援連携協議会事務局として運営に努め、地域の情報交流の機会を深めるとともに、情報交流会における外部講師の講話を夏、冬の2回実施し、参加した関係機関の方々からの高い評価をいただくことができ、地域支援に貢献することができた。	B	地域の特別支援教育に関する期待は高く、本校のセンター的機能は周知されている。センター的機能の発揮だけではなく、進路拡大のためにもホームページ以外にSNSを活用した情報発信も検討してほしい。	地区特別支援連携協議会への福祉機関の加盟増加を図り、情報交流会や研修会の充実を図る。地域の小、中、高等学校の特別支援教育推進のため、本校に委嘱されている教育支援委員会委員や巡回相談員、エリアコーディネーターでの情報共有と相談機能の強化を図る。
(11) 総括		保護者のアンケート結果からは、21項目中20項目において3.5以上（「達成できている」）との評価を得ていることから、保護者が児童生徒にとって充実した環境で教育活動が実施されていることを実感できていると思われる。今年度から授業や行事などをできる限りコロナ禍以前の状態に戻したことで、学校行事に対する保護者の評価は最も高かったが、昨年度同様に保護者との話し合いの機会を要望する声が多い。また、進路指導については、小中学部と高等部では評価に差があり、小中学部の保護者に対する進路指導の充実が求められる。進路指導と家庭との連携については、改善の余地があると考えられる。				